

医療の質向上のためにユニークで先進的な取り組みをしている病院を紹介しております。

ロボットリハビリテーション発展のために

特定医療法人 茜会 昭和病院

昨年11月25日、ロボットスーツ「HAL^{ハル}医療用下肢タイプ」が、厚生労働省により医療機器として承認されました。また本年1月27日、同機器の保険適用が決定しました。

ここ昭和病院では、全国に先駆けて、平成21年より「HAL」を導入しています。その後、導入する施設も徐々に増えてきましたが、当時、ロボットの使い方についてはほとんど知られていなかったため、昭和病院は、情報交換する場として平成23年に第1回目の研究会を下関で開催しました。翌年、第2回研究大会を京都で開催すると同時に「ロボットリハビリテーション研究会」を創設しました。その後、湯布院、札幌、沼津と年1回の会を重ねてきており、本年は11月に神戸で開催する予定です。研究大会には、医師をはじめリハビリテーション関係者が参加しますが、昨年から大学の研究者も参加するようになり、次第に交流の輪が広がってきています。また、第1回目の参加者は60～70人程度でしたが、昨年は300人くらいの規模に拡大しています。この研究会を進めるために全国に10数名の世話人がいますが、昭和病院の田中恩リハビリテーション部長がその代表を務めています。

研究大会では、各施設におけるロボットの活用状況、成果の報告や、苦労している点についての相談等が行われます。研究発表会のような堅いものではなく、より実用的でアットホームな情報交換会を目指しています。一昨年からは、会の名称も「ロボットリハビリテーション・ケア研究大会」に変更し、介護支援ロボット等まで広く研究の対象にしています。ロボットや機器の展示も同時に行っており、参加者の発表を聞いてその場で体験もできるようにしています。

昭和病院では、ARETS^{アレツ}と呼ばれるチームを発足させ、これらの活動を担当しています。ARETSとは Advanced Rehabilitation Engineering Team of



Showaの頭文字をとった略称であり、院長、事務長、医師、リハビリテーションスタッフ、臨床工学技士の合計10数名で構成されています。このARETSの中に、歩行支援ロボット「HAL・ACSIVE^{アクシブ}」、アザラシ型メンタルコミットロボット「パロ」、電気刺激装置「IVES^{アイビス}」等を担当するチームがあり、各チームの代表が月1回リハビリテーション工学部会を開いて、活動状況、研究の進み具合等を報告します。この内容に基づいて、新たなロボットを導入したり、研究報告を行ったりしています。

今後は、リハビリテーション専門医の意見を取り入れた、より科学的根拠に基づいたロボットの使い方が追求されていきます。

田中部長は「患者さんにどのロボットが合うかを見つけて、それをうまくマッチさせることが一番重要なことであり、これにはスタッフのスキルアップが必要」と考えています。

佐柳進院長は「超高齢社会におけるさまざまなニーズに対応するため、現場でいろいろな工夫を積み重ねて、いずれはロボットの開発力まで培ってほしい」と語りました。

ロボットの進化とともに人間の進化が求められています。

(企画部 林 秀行)

特定医療法人 茜会 昭和病院

山口県下関市。許可病床数398床。1999年11月認定第LL0013号(長期療養200床以上)、2004年11月認定第LL0013-02号(療養400床以上)、10年1月認定第LL13-3号(一般・療養200床以上500床未満)、14年12月認定第LL13-4号(慢性期病院(200床以上)(主たる機能))(リハビリテーション病院(副機能))。